比較文化研究
No.84,　2008

苗代川地方伝来朝鮮語学習書類の日本語の地域性について

片　茂　鎮
(韓国・檀国大学)

On the Japanese regional dialect of Korean Textbooks introduced to Naeshirogawa

Mu-jin PYON
Dankook University

はじめに

本稿は、近世期における 薩摩苗代川（現鹿児島県美山）に伝わる朝鮮語学習書類の日本語、その中でも特に語彙の性格を究明するための論考で、「『交隣須知』日本語の特殊性」（『比較文化研究』74）と「苗代川地方伝来の朝鮮語学習書類の日本語について」（『比較文化研究』 81）に継ぐものである。前回は以下のような文献資料の語法的な面を中心に検討してきたが、今回は『交隣須知』をも眼中に入れた総体的な観点から、この朝鮮資料における日本語 の語彙の地域性を考えてみたい。本稿で扱う文献資料は次のとおりである。

- 『交隣須知』苗代川本(4巻4册)他　書写期不明(19世紀初？)　〈交隣〉
- 『隣語大方』筑波大本(9巻)　宝歴元年(1751)書写　〈隣語〉
- 『講話』京都大本(2巻2册)　書写期不明　〈講話〉
- 『淑香伝』沈寿官本(2巻2册)　書写期不明　〈淑香〉
- 『崔忠伝』京都大本(1巻1册)　書写期不明　〈崔忠〉
- 『韓語訓蒙』京都大本(1巻1册)　文久4年(1864)書写　〈韓語〉

1. 方言的な語彙

◎ イタミ

動詞の「いたむ」は「앓다〔病む〕」の訳でいいのであるが、名詞形のイタミが「병(病)」の意味で用いられるのは方言的と言える。〈講話〉〈隣語〉〈淑香〉に例が見える。

・公儀ノ ヲイタミガ ヲムウコサリマシテ　〈講話下19a〉
・一代官サマノヲイタミハ　夜間　如何ゴザラシャレマスルカ　〈隣語六16a〉

・妾 タミ入 死ソウニ ナリタニ 〈淑香下51〉

〈交隣〉に「병(病)・증(症)」の意味に使われている例が4例ぐらい見える。

〈苗/三61b〉 咄 シタキッテ ナケイタト云テモ イタミカ コヽロマカセニナロウカ
〈苗/三62b〉 腫 ハレイタミハ シツヨリ ナルト 申マスル

◎ カロウ

カロウ〔背負う、負う〕はカルウの形もあってロドリゲス『日本大文典』（以下『ロ』と略記）に九州方言とある。18世紀の鹿児島地方の語彙を収めているゴンザの『新スラヴ・日本語辞典』（以下『ゴ』と略記）、『鹿児島県方言辞典』（以下『鹿』と略記）などにも薩摩方言としてカルウの形が載っている。〈淑香〉にカロウの1例が見える。

・般若山ニテ カロフテ ヲキユイタ 盗賊ノヨウナルヲ 〈淑香下171〉

〈交隣〉にも例が見える。〈苗〉にはカロウ形であるが、増補本類には大体カラウである。これらが刊本類ではカルウに直されている。

〈苗/二28b〉 刈 カッテ クヽッテ カロフテ コイ
〈再/二21b〉 刈 刈テ クヽリテ カルウテ ゴザレヨ

ひいては、カロウが名詞化して荷物の数を数えるカロイ〔짐〕の形も現れている。当時カロウが一般的に使われていたことが想像できる。実際対馬の周辺部ではカローの形も用いられているようである。1)

〈苗/三28b〉 一負 ヒトカロイカ イクマル ヲモサホト イッテヲルカ

カルウは対馬や鹿児島を含めた九州全域で使われていたようである。

◎ ナバ

ナバは「きのこ」で『ロ』に九州方言とある。『鹿』に薩摩方言として、「対馬方言集」「対馬北端方言集」のような対馬方言集にも現れている。〈韓語〉にナバの例が見える。

・ナバハ、木ニモ ショフジ、ツチニモ デル〈韓語29a〉

一方、〈交隣〉には〈苗〉をはじめとした写本類にナバの用例が見えるが、明治 14年の初刊本にもナバである。初刊本の校正増補者の浦瀬裕は対馬人である。当時対馬辺りで一般に用いられていた語彙であろう。これが明治37年刊の校訂本に「きのこ」に改められている。

〈苗/二25a〉　菌　　ナバハ キニモショフジ チニモ デマスル
〈初/二18a〉　菌　　ナバハ 木ニモ デヽ 地ニモ 出マス
〈校訂/065〉　菌　　きのこは きにも 出れば 地にも 出る。

◎ 腹ガフトル・フトイ

フトルが対馬地方では「大きくなる」の意味として使われていたが、似た意味合いのフトルが「腹ガフトル」のように熟語的に用いられて 「비브ᄅᆞ다」（腹がいっぱいになる）の意を表す例が〈淑香〉に見える。また〈韓語〉にはフトルの代りにフトイが用いられている。 2)

・腹ガフトラヌト 云フタ 〈淑香下63〉
・ハラガフトヒ　〈韓語24b〉

この「腹ガフトイ」の例が〈交隣〉に２、３例出ている。

〈苗/三52b〉　食　クウテ ハラガフトウコサル
〈初/二40b〉　食　ク(ウ)タニ 腹ガフトウゴザル
〈校訂/251〉　食　澤山 食って 腹がふくれました。

やはり初刊本においても写本類の「腹ガフトイ」のままである。校訂本では「腹がふくれる」に改められている。その他フトイは大体において「 ᄒᆞᆯ다」（大きい）「자라다」（育つ、伸る）の意に用いられている。この「フトイ」と「ホソイ」が大小の概念を含んでいるのも、対馬方言書『日暮芥草』の記述と通じるところがあって、対馬方言の反映と見られる。 3) 実際、竹敷漁史の「対馬方言」にもフトイは「大なる」の方言となっている。

◎ ヨマ

ヨマは『ロ』に「よりいと、よりなわ、綱糸」、『ゴ』『鹿』に「紐、縄」、「対馬北端方言集」にも「太い糸」とある。〈淑香〉と〈交隣〉に用例が見える。

・ヨマニテ クビリツケ　〈淑香下8〉

〈苗/三16a〉　錐　キリテ アナアケテ ヨマヲ トヲシテ ムスベ

〈初/三27b〉　錐　キリデ　トホシテ　ヨマデ　ツナイデ　ムスベ
〈校訂/215〉　錐　錐で　とほして　こよりで　つないでおけ。

校訂本では「こより」に書き改められている。対馬と薩摩地方を含めた九州の広域で一般に使われた方言のように見受けられる。

◎ ユハチ、イハチ4)

「宴享」の意味のイハチが〈講話〉〈隣語〉に見える。〈講話〉にはユハチの語形も現れる。5)

・ユハチニ　ナッタト　〈講話上10b〉
・イハチノ　日トリ　〈講話上8b〉
・イハチニ　マカリ出ルヤウニ　〈隣語二4a〉

この「いはち」は『捷解新語』にも一般に用いられ、語彙集の『倭語類解』には「ゆはち」の形で現れている。

・ふうしん　いはちお　いそいで　しまるせうほどに　〈初捷2:05b〉

いっぽう、〈交隣〉の場合、苗代川本には「연향(宴享)」の字音読みとなっているが、沈寿官本にはショウオウ（請用）6)、対馬本にはイハチである。

〈苗/一13a〉明々後日　シアサッテハ　エンキョ(ウ)ナニヨリ　サヤウニ　ヲモワシャレ
〈沈/一12b〉明々後日　シアサッテハ　ショウヨウデゴザルカラ　サヨウニ　ヲモワシャレイ
〈対/一16b〉明々後日　シアサッテハ　イハチデアルニヨリ　サヨウ　ヲボシメセ

その他、朝鮮時代に臨時職として任命していたサビクヮン（差備官）のような官職名も〈講話〉に見える。

・サビクワンニ　当テ　〈講話上14b〉

ほかに、〈交隣〉には対馬方言として韓国語の語彙に由来する特殊な日本語が現れている。その言葉についてはすでに小倉進平博士の指摘がなされているが（小倉 1932）、ここではそれに基づいて少し補足しておこう。

○ キミスイ

現代の「김치」の語源にあたる「침치(沈菜)」を日本語に写した語。苗代川本にはキミスイとツケモノが当てられているが後者が一般的である。〈ソ〉〈濟〉のような増補本には逆にキミスイが一般的である。

〈苗/三 47b〉　菹　　キミスイハ ナレテコソ アジカ スユズユトシテ ヨウコサル
〈濟/三 84a〉　菹　　ツケモノ(/キミスイ)ハ 味ガ スユウアル
〈初/三 58a〉　菹　　ツケモノハ アジガ スウゴザル

〈濟〉にはツケモトとキミスイを併記した例も見える。

○ クツロ

「온돌(温突)」の意味の「구들」と関連があろう。

〈苗/一06b〉　寒　　日ガ サムイニヨリ クツロニ 入テ ハナシナリトモ イタシマショフ
〈対/一09a〉　寒　　天氣ガ 寒テ クツロニ 入シャレマセイ
〈初/一07b〉　寒　　日ガ 寒イニヨリ クツロニ 入ラシャレヨ
〈校訂/011〉　寒　　寒いから 温突部屋へ は入っていらっしゃいまし。

初刊本では「구들」が「방(房)」になっているが対訳の日本語はクツロのままである。当時は一般に使われていたものと思われる。それが校訂本で「 温突部屋」に変わっている。

○ サハチ

「사발(沙鉢)」に当たるサハチが〈交隣〉の写本類に見える。〈校訂〉には韓国語の発音にもっと近いサバルとなっている。

〈苗/三10b〉　沙鉢　　サハチニ (冷水)ヲ クンテ ナツ ノメハ キミガヨフコサル
〈ソ/三35a〉　沙鉢　　サハチニ 冷ヤ水 汲ンテ ノメバ キミガヨウゴサル
〈初/三23b〉　沙鉢　　沙鉢ニ 冷水ヲ 汲デ ノメバ キミガヨウゴザル
〈校訂/260〉　椀　　サバルで 水を 呑むと 氣持がいゝ。

この他にも、〈交隣〉には韓国語の語彙に由来する特殊な日本語がいくつか現れている。例を示す。

○サムソギ 삼승 (三升)〈ソ//三 19b〉 ○シャチガサ 삿갓〔蓑笠〕〈苗/三 03a〉 ○ズリ/スリ 숨/슴〔狸〕 〈苗/二 12a〉〈濟//二 08b〉 ○ソンナイ 교직(交織)/섯나히 〈苗/二 55a〉〈ソ/三 15a〉 ○テクリ 뎌고리〔上着〕〈苗/二 58a〉 ○カイリマ 개리마 (介里麻)〈濟//三 28b〉 ○

トンビ 돈피〔貂〕〈濟/二 02a〉 ○ノロ 노로〔獐〕〈ソ/二 01b〉 ○バッチ 바디〔袴〕〈苗/三 01b〉○カホイ 가회（加會）〈濟//三 82b〉 ○トッカブ 돗갑이〔妖怪〕〈ソ/三 01b〉 ○ ボンゴチ 벙거지?〔戰笠〕〈ソ//三 28b〉など。

◎ デケル

「できる」が訛ったデケルの用例が〈淑香〉〈交隣〉に見える。

・子トモト モノ云 コトモ デケス 〈淑香下174〉

〈苗/四43b〉 高卑 タカヒクヲ ワキマエズシテ テケルカ

「対馬方言集」にデケントヂャ（できないのよ）、竹敷漁史の「対馬方言」にデケン（いけない）とある。

◎ テス

「亭主、主人」の意のテスが〈淑香〉に見える。

・テスノ 夫人 ナイテ 云ワシヤルニハ 〈淑香下47〉

『ゴ』に「亭主」とある（テスオナゴ：亭主女）。薩摩方言の反映と思われる。

◎ カカサマ

カカ（母）は『ロ』に「子が母を親しみ敬って呼ぶ語」とあり、『ゴ』『鹿』には薩摩方言とある。奥村三雄（1973）によると対馬方言でもカカ（母）とそれの丁寧語形としてカカサマが使われていたようである。〈淑香〉に1例が見える。

・カカサマ 〈淑香下80〉

2. 方言と思われる語彙

その地域性についてはより検討の必要な方言的な語彙であるが、〈淑香〉に多い。

◎ フサバケ

フサバケは「質が劣っている、悪い」の意味に使われていて、〈講話〉に1例ある。

・フサバケニハ コサリマスマイニヨリ 〈講話下17a〉

この語は〈交隣〉の巻一にも見え、大体「무상(無狀)ᄒᆞ다、미련(未鍊)ᄒᆞ다、용렬(庸劣)ᄒᆞ다」の対訳が当てられている。しかし、苗代川本にはなく、対馬本やアストン本あたりにその用例が見える。対馬の方言と関係があるように見受けられる。

〈苗/一35b〉　劣　　アレハ ブチョウホフニシテ　ドコニモ　ツカイトコロガナイ
〈ア/一43a〉　劣　　ソレハ　フサハケニシテ　トコニモ　用イラレヌ　モノシャ
〈対/一43a〉　劣　　ソレハ　フサバキナニツキ　ドコニモ　ツカワレヌ　モノジャ

◎ キコエル

「正しい」「まともだ」の意に用いられるキコエルが〈隣語〉に2例出ている。

・私ガ　タトヘ　老妄致シテ　キコヘヌ　コトヲ　云タトモ〈隣語一5a〉

このキコエルは〈交隣〉の増補本類や刊本類にも普通に用いられている。当時対馬では一般に使われていたのではないだろうか。

〈苗/一06a〉　翌年　ヨクネンマテ　ナラヌト　申ニヨリ　フラチニゴサル
〈対/一09a〉　翌年　ヨクネンマデ　ナランヌト　云ハレテ　キコヘマセヌ
〈初/一07b〉　翌年　翌年マデ　ナラヌト　云フニヨリ　キコエマセヌ

◎ ヂキ

ヂキニは「みずから」の意味で、朝鮮資料では大体「친(親)히」に対訳されている。

・金典夫妻ヲ　ヂキノ父母如ク　イタシタ　〈淑香下174〉
・祭文ヲ　ツクリ　ヂキニ　マツリヲ　シタニ　〈淑香下43〉

『捷解新語』や『隣語大方』（朝鮮刊本）にも例が多い。

・わしの　直に　参て　賴事と　存知ますれども　〈隣語九8b〉

◎ ヲムイ

ヲムイ（重い）、マムル（守る）のように、語中のマ行音節における母音 oとuの交替現象が見える。

・ヲムウコザルニヨリ　〈隣語二1b〉
・ヲムウコサリマシテ　〈講話下19a〉

・ヤワリ ムナシク マムリテ イマスルノミデコサリマシ 〈講話下5a〉
・ハヤク 行 マムレト 云テ 〈淑香下13〉

これが果たして方言性によるものかどうかについては さらなる検討が必要であるが、『ゴ』にオム（重う）、オムサ（重さ）のような語彙が挙げられている。〈交隣〉にもヲモウのほかにヲムウの形もよく用いられている。

〈苗/三18a〉 杵 キネガ ヲムウシテコソ（米)ガ ハヤフ ツケル

◎ ヨケイニ

「たくさん、大勢」の意味に使われるヨケイニの用例はほとんどの朝鮮資料に出ている。当時一般的な語彙に属するものと思われる。

・ツイエナル コトヲ ヨケイニ ウケマシテ 〈講話下23b〉
・ソナタハ 受苦 ヨケイニ イタシタ 〈崔忠50b〉

〈交隣〉においては写本・刊本ともにほとんど「たくさん」の意に用いられている。『捷解新語』の改修本類にもその例が見える。

・さくじつわ さけお よけいに たびて しやうね なう かゑりまして 〈改捷3:37a〉

◎ セワする

「急ぐ」の意味に使われたセワスルの例が〈講話〉と〈韓語〉に見える。対訳の韓国語は「서두르다」である。

・下行ニ ナルヨフニ セハイタシテミマショフ〈講話上19?〉
・セハシテ、ミマショフ 〈韓語9b〉

◎ ワルイ

「怖い、恐ろしい」に意味に用いられたワルイの例が〈淑香〉〈韓語〉に見える。対訳の韓国語は「모질다、 사납다」。

・モシ ワルイ 獣生ニ ヲヲタラバ 〈淑香下144〉
・ワルヒ、人ジャ 〈韓語21b〉

◎ イソする

「ワカメを採る」の意に使われたイソするの例が〈講話〉〈韓語〉に見える。対訳の韓国語は「히치(海採)ㅎㄷㅏ」である。

・イソイタシニ　〈講話下6b〉
・イソシニ、ユキマシタ　〈韓語10b〉

◎ ウバル

「埋められる」の意に用いられたウバルの例が見える。このウバルをウマルと関連づけて考えれば語中マ行のmとbの交替ということになるが、このような例としてセバル（迫る）の例もある。

・ヲレガ ウバル 穴ヲ〈淑香下11〉
・ハツソク セバッタカラ〈淑香下27〉

橋口（1987）によると鹿児島方言ではマ行の音がバ行の音に変わることもあるというので、薩摩方言の影響かもしれない。

その他、〈淑香〉だけにある語彙をまとめる。

○コブシ（尻尾）〈淑香下12〉　○イネル（寝る）〈淑香下53〉○カウル（託ける）〈淑香下36〉○身ヲナガス（溺れる）〈淑香下50〉　○ツク（切れる）〈淑香下1〉　○ツク（声を出す）〈淑香下99〉　○ベ（尋）7)〈淑香下114〉　○ゴヲンヲハラス（ご恩を報いる）〈淑香下93〉

なお〈淑香〉には古語に属する語彙も多いが、これらも方言との関連性を検討する必要があると思われる。

○テノゴイ（手拭）〈淑香下12〉　○窓ヲ立テル（窓を閉める）〈淑香下3〉　○ヒロイ（多い）〈淑香下66〉○セナ（背中）〈淑香下131〉　○スギル（暮す、生活する）〈淑香下34〉〈淑香下116〉8)　○クガ（陸地）〈淑香下43〉など。

クガは〈交隣〉の苗代川本にのみ出ている。他はカチである。〈淑香〉と同じく苗代川地方に伝来する苗代川本であることに注目したい。

〈苗/二 44b〉　陸路　クガヲ ユクユヱ ニモツハ フネノ人ニ タノムヨリホカハゴサラヌ
〈ソ/二 48a〉　陸路　カチ ユクユヱ 荷ハ 船ノ人ニ アヅケル外ハゴサラヌ

〈初/二 37b〉　陸路　カチカラ 往ク故 荷ハ 船ノ人ニ アヅケル外ハアリマセヌ

◎ ズント

関連語として、前田勇編『近世上方語辞典』に「ずっと、ずいと、すっと」が挙げられている。この語が〈韓語〉と〈交隣〉に出ている。

・ヅンド、ヨイ　〈韓語1a〉

〈ア/一39a〉　性　　此 人ハ 性質カ ズント スラリトコサル

〈対/一38b〉　性　　此 人ハ キシツガ ズント スラリトゴサル

〈武/一39b〉　性　　コノ 人ハ ムマレツキガ ズント スラリトゴザル

◎ チウニ

『ロ』に「暗記するの意」とある。この語が〈韓語〉と〈交隣〉に出ている。

・チウニハ、ヨミニクウゴサル　〈韓語1b〉

〈苗/三34b〉　誦　　チウニ ヨメハ シセント コトハハ テマスル

〈天/三34a〉　誦　　チウニ 肢(ソ)ランズレハ シゼント コトバハ デル

同じく苗代川に伝わる『交隣須知』には薩摩方言と結びつく語彙がないと言われるが、〈淑香〉を中心とした他の文献には、一部ではあるが、薩摩方言と思われる語彙が見える。この方言と思われる語彙に分類している語彙などについてより細かい検討が必要かと思う。

まとめ

『交隣須知』の日本語は、大体において対馬を含む九州北部地方の方言との関連性が認められるが、拙稿の片(2006)では語彙・語法・表現法において、北九州の方言圏のなかでも対馬方言の言語要素が多く含まれていること、片(2008)では当面の薩摩苗代川に伝わる朝鮮語学習書類の日本語からも同地域性が認められることを指摘してきた。なお、この朝鮮語学習書類には語彙的にみて、対馬方言とはまた別に地元の薩摩方言的な要素も含まれていることが指摘できるのでないかと思う。今後『淑香伝』のような古小説類の日本語についてより綿密な検討が必要であろう。

〈参考文献〉

大浦政臣(1932)「対馬北端方言集(一)」『方言』2-2
奥村三雄(1973)「対馬方言の性格」『九州文化史研究所紀要』18
小倉進平(1932)「国語特に対馬方言に及ぼした朝鮮語彙の影響」『方言』 2-7

ゴンザ編(1985)『新スラヴ・日本語辞典』（村山七郎編）ナウカ
迫野虔徳(2001)「対馬方言集『日暮芥草』」日本語研究会編『日本語史研究の課題』武蔵野書院
竹敷漁史(1908)「対馬方言」『風俗画報』165
土井忠生訳(1955) ロドリゲス『日本大文典』三省堂
橋口　満(1987)『鹿児島県方言辞典』桜楓社
前田勇編(1964)『近世上方語辞典』東京堂出版
片　茂鎮(2006)「『交隣須知』日本語の特殊性」『比較文化研究』74
_____(2008)「苗代川地方伝来の朝鮮語学習書類の日本語について」『比較文化研究』81

1) 奥村三雄「対馬方言の性格」p.103 参照。
2) フトイが「ヨ다（大きい）」の意に使われた例もある。
　・アマリ　フトイ〈韓語 16a〉
3) 迫野虔徳（2001）p.233 参照。
4) 古い韓国語の「이바지」を写したもの。小倉(1932) p.498 参照。
5) 〈講話〉にはほかにケンエンが当てられた例がある。
　・ケンエンニ　イタサウト　申テモ　〈講話上19a〉
6) 日葡辞書に「人を食事などに招待すること」とある。
7) 長さの単位。１べは約180㎝。
8) 一般に「지나다」はスギユクに対訳されている。